



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ＜翻訳＞D・ヒューム「エッセイを書くということ」                                                    |
| Author(s)    | 柘植, 尚則                                                                      |
| Citation     | 臨床哲学ニューズレター. 1997, 1, p. 103-106                                            |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/81720">https://doi.org/10.18910/81720</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔翻訳〕

## D・ヒューム「エッセイを書くということ」

David Hume, "Of Essay Writing", in: *Essays Moral and Political*, Vol. 2, 1742. : T. H. Green and T. H. Grose (eds.), *The Philosophical Works*, London, 1882, Vol. 4, pp. 367-370.

柘植尚則 訳

人類のうちで洗練された人々は、たんなる動物的な生活にふけるのではなく、精神活動に携わるが、彼らは「学者」(learned)と「社交家」(conversable)に分かれるだろう。学者は、より高度で難解な精神活動を自分の分担として選んだ人々であり、その活動は閑暇と孤独を必要とし、長い準備と厳しい努力なくしては完成の域には達しえない。社交の世界は、ある社会的な気質や、ある愛好と結びついている。その愛好とは、知性をより容易により適度に働かせ、人間に関わる事や生活上の義務について明確に反省し、そして、周囲の個々の対象がもつ欠点や卓越さを観察しようとする傾向である。そうした事柄を考察することが精神にとって適切な訓練となるには、一人で活動するのは十分でなく、人間どうしの交際や社交が必要である。そして、交際と社交によって、人類は社会のうちに結びつけられる。社会では誰もが、できる限り最善のやり方で観察に基づく自分の考えを述べ、そして、喜びだけでなく知見をお互いに交換する。

学問の世界を社交の世界から区別したことが前代の大きな欠点であったように思われるし、それが書物と交際の両方にかかなりの悪影響を及ぼしたに相違ない。歴史、詩、政治に、あるいはせめて哲学上のより明白な諸原理に時おり頼ることもしないで、理性的動物の娯楽にふさわしい会話の話題を見いだすことができるのだろうか。会話はすべて、ずっとうわさ話やむだ話ばかりでなくてはならないのか。精神は決して向上されてはならず、永遠に「ウィルはこうした、ナンはああした、といった果てしないおしゃべりに酔わされ、疲れさせられ」ねばならないのか。

だとすれば、人と過ごす時間は、人生で最も無益なだけでなく、最も面白くないものになるだろう。

他方、学問も、大学や独房に閉じ込められ、世間やよき交際から隔離されたせいで、大失敗であった。いわゆる「純文学」(belles letters)はどれも、人生や風習に対する愛好がなく、思想と表現における自由や才能(それらは社交によってのみ獲得できるのだが)がない連中によって修められたために、まったく野蛮なものになった。哲学でさえ、この陰気でわびしい研究方法によって破滅し、その結論は空想的に、伝達の様式や手法は難解になった。実際、論証において経験を決して参考にしない連中、あるいは、経験を、そこにおいてのみ経験を見いだすことができるところ、つまり、生活や社交のうちに探し求めない連中から、何を期待できようか。

おおいに喜ばしいことに、私の見るところ、かつて著述家を人類から遠ざけていた内気で引込み思案の気性は、今日の著述家にはかなりの程度失われており、同時に、世事に通じた人々は、会話の最も好ましい話題を書物から借用することを誇りに思っている。学問の世界と社交の世界とのこの同盟がまったく幸いにも始まったのだが、それが相互の利益となるようさらに改善されることが望ましい。そして、その目的にとって、私が人々を楽しませようと努めているようなエッセイほど有益なものを、私は知らない。この意味では、私は自分を、学問の領土から社交の領土へのいわば駐在者か大使と思わざるをえないし、大いに依存しあっているこれら二国間の良好な交信を促進するのが、私にとって変わらぬ義務と考えている。交際で起こることは何でも、学者に伝えるつもりであるし、私の母国に見られるもので、利用と娯楽に適したものはどんな商品でも、交際のうちに輸入するように努めるつもりである。取引の均衡について気を配る必要はないし、両方で均衡を保つのに何ら困難はない。この交易の材料は主に社交と生活によって供給されねばならない。それを加工することだけが学問に属する。

駐在を任命された国の主権者に敬意を払わないとすれば、大使の許されない怠慢であろう。それと同じく、社交の帝国の主権者である女性に特別の敬意をもって話しかけないとすれば、私はまったく弁解できないだろう。私は尊敬をもって女性に接する。もし、私の同国人である学者が、頑固で独立した人種で、

自由を失うまいと特に気を配り、服従に不慣れである、というのでないのであれば、私は学問の共和国の主権を彼女たちの美しい手に譲り渡すだろう。だが、現実にはそうはいかないから、私の任務は、共通の敵、理性と美の敵、鈍い頭と冷たい心をもった連中に対して、攻撃であれ防衛であれ、同盟を望むことに止まる。直ちに、最も厳格な復讐心で連中を追跡しよう。容赦なく攻撃しよう、ただし、健全な知性と繊細な情愛をもった人々は除こう。思うに、これらの性質は分かつことができないとつねに気づかされるだろう。

まじめに言えば、暗示など陳腐になる前にやめにすれば、女性、分別と教育のある女性（そうした女性にだけ私は話しかけているのだが）は、優雅な文体で書かれたもの（polite writing）すべてに対して、同程度の知性をもった男性よりもはるかに優れた判定者である、というのが私の意見である。博学の婦人に向けられるありふれた嘲笑にあまりにも脅かされて、婦人があらゆる種類の書物や研究をまったく放棄して男性に委ねてしまうとすれば、それはむだな狼狽である。そうした嘲笑の恐怖には、婦人に愚か者の前では知識を隠させること以外、影響を持たせてはならない。愚か者は知識にも婦人にもふさわしくない。嘲笑という態度はやはり、男性が女性に対して優位に立とうとするうぬぼれた権利に基づいている。だが、女性の読者は安心するだろう。世事に通じた分別のある男性は皆、女性の知識の範囲内にあるような書物に対する彼女たちの判断を大いに尊重し、銜学者や注釈者のどれも面白くない話よりも、規則に指導されていないとはいえ、女性の趣味の繊細さに信頼を置いている。趣味の良さで等しく有名な、また女性に対する親切で有名なある隣国では、婦人はある意味で、社交の世界だけでなく、学問の世界の主権者でもある。優雅な文体で書く者で、何人かの名高い女性の判定者による称賛を受けずに、人々の前にあえて出ようとする者はいない。なるほど、彼女たちの評決に対して、時には不満が語られる。特に、コルネーユの称賛者たちが、その偉大な詩人の名誉を、ラシーヌが彼から引継ぎつつあった優勢から守るために、よくこう言っていたのを覚えている。それほど年老いた男がそれほど若い男を相手に、女性の判定者の前で評価を争うことができるとは考えられない、と。だが、この発言は不当なものとなった。後代の人々はその法廷の評決を批准したように見えるからである。ラシーヌは亡くなったけれども、今でも女性のお気に入りであり、

男性の最も優れた判定者たちも同様である。

女性の判断を疑ってしまう事柄が一つだけあるが、その判断とは、女性に対する親切と献身を扱った書物に関するものである。女性はふつう、親切と献身にすっかり舞い上がってしまう。そして、大半の女性はその感情の正しさよりも暖かさに喜ぶように見える。私は親切と献身を同じ主題として述べるが、それは、このように扱われる時には、実際には両者が同じものになるからである。また、両者がまさに同じ状況に依存することに気づくだろう。女性は優しく多情な気質をかなり持っているために、親切や献身についての判断を誤り、表現がまったく不適切で、感情がまったく不自然なものによってさえ、容易に心を動かされる。アディソン氏の、宗教に関する洗練された論述は、神秘的な献身についての書物と比べれば、女性にとっては味気がない。また、オトウェーの悲劇は、ドライデン氏の描く放蕩者たちのために退けられる。

婦人がこの点に関する誤った判断を正す気があるのなら、あらゆる種類の書物にもう少し慣れてもらおう。分別と知識のある男性に対して、婦人の集まりに自由に出入りするように勧めてもらおう。最後に、私の提唱している、学問の世界と社交の世界の連合に心から同意してもらおう。おそらく、学者よりもいつもの追従者から、婦人はより多くの慇懃な振る舞いを受けるだろう。だが、それほど誠実な親愛は期待できないのが道理である。そして、婦人が影のために実体を犠牲にするほどの間違った選択をすることは決してないと思う。